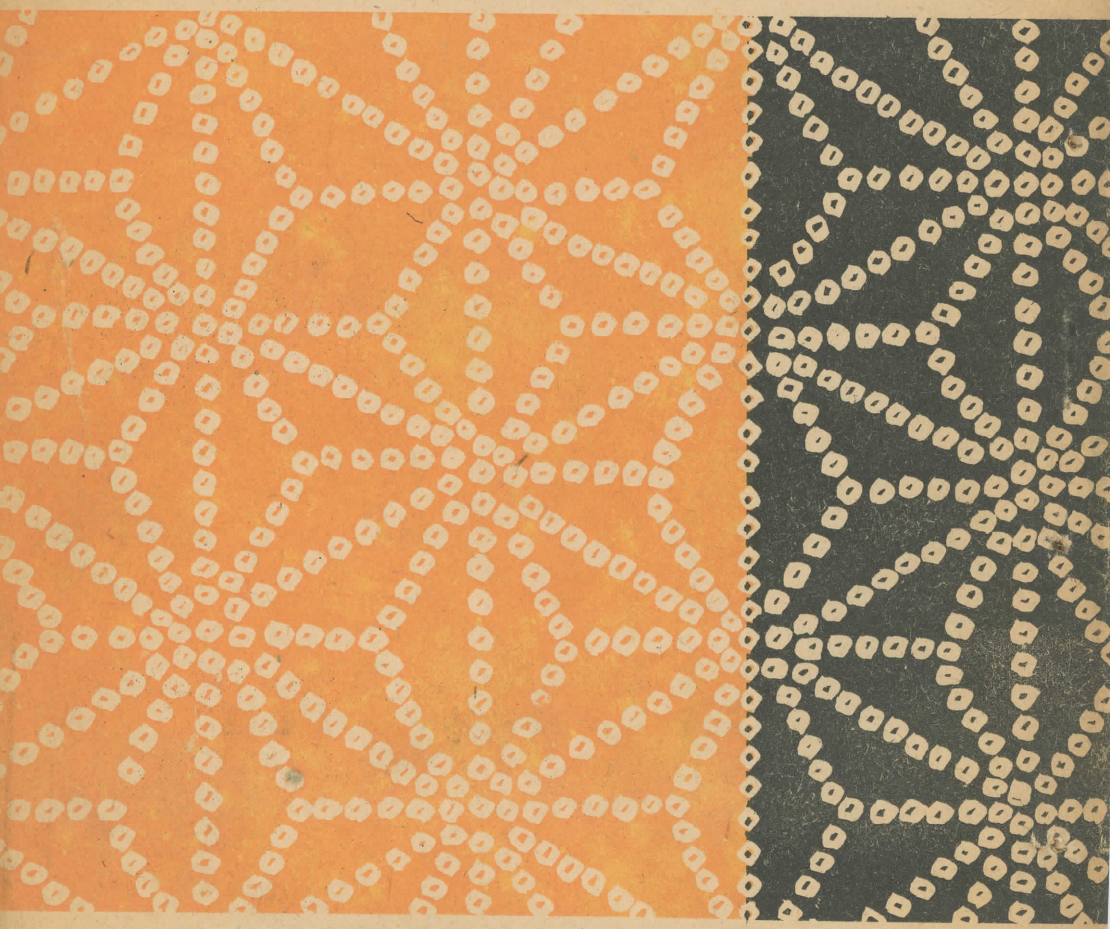
大阪女子音樂學校

全國少年少女雄辯大會

第三回



演題募集要項

警報發令時に於ける防空上の措置要綱試案

一、空襲警報の場合は勿論、警戒警報發令の場合も直ちに興行を中止し警報解除まで休場致します。

二、右により興行中止の場合に於ける既に發賣濟みの入場券は左記の方法で御取扱ひ致します。

（イ）興行開始中警報發令により即時中止されし場合、その中止時刻が全興行時間の三分の二を經過せざる時は、警報解除の翌日より御買求めの場所に於て他日の入場券と御取換へだけを致し御拂ひ戻しは致しません。

（ロ）開演後三分の二時間を經過したる時は御引換へを致しません。

（ハ）興行開始前の前賣入場券は可成他日の入場券と御引換へ下さる樣御願ひ致します。但し御引換へは警戒警報解除の翌日より向十日間以内に該入場券御買求めの場所にて御取扱ひ致します。

三、警報解除されたる場合は左記の如く興行を開始致します。

（イ）警報解除が當日興行開始時間の四時間以前の場合は當日の興行を開演致します。

（ロ）若し四時間以内の場合は當日の興行を開演せず、その翌日より普通通り開演致します。

四、以上種々の場合に備へる爲め御買求めの入場券は必ず御用濟みまで御所持願ひます。

大阪 文樂座人形淨瑠璃芝居

全員引越興行

晝の部（一時開演）

鶴山古跡松　雪責の段

攝州合邦辻　合邦住家の段

彌次良兵衞喜多八　東海道膝栗毛

夜の部（五時開演）

戀女房染分手綱　重の井子別れの段

三勝半七　艷容女舞衣　酒屋の段

平家女護島　鬼界ヶ島の段

釣女

昭和十八年十二月一日初日

外題 七日間替り

御觀劇料（晝の部）

一等…（御一名）…四　圓（稅六割共）
二等…（御一名）…二圓四十錢（同　）
三等…（御一名）…一圓二十錢（同四割共）
三階…（御一名）…八十五錢（同　）

御觀劇料（夜の部）

一等…（御一名）…七圓三十五錢（稅九割共）
二等…（御一名）…四　圓（同六割共）
三等…（御一名）…二圓四十錢（同　）
三階…（御一名）…一圓十錢（同四割共）

切符取扱所

銀座地下鐵街芝居切符賣場
電話銀座一八一七六九七〇
プレイガイド各店取扱
銀座本店電話京橋（一五〇一一）より（一五〇一三）まで

切符賣場用　電話銀座　七五七
事務所用　　　　　五八七
お客用　　電話銀座　一九〇

木挽町　新橋演舞場

名連線味三・夫太

| | | |

中將姫雪責の段

岩根御前　竹本七五三太夫
中將姫　竹本文太夫
大貳廣次　竹本隅若太夫
浮舟　竹本越名太夫
下僕　豊竹松島太夫
桐の谷　豊竹つばめ太夫
豊成公　竹本大隅太夫

鶴澤綱造
胡弓　鶴澤清友

鵯山古跡松

中將姫雪責の段

解說

中將姫の傳說は「當麻寺緣起」はじめ古くから多くの小說稗史の類に見えて居り、古淨瑠璃にも岡本文彌の語物に「中將姫蓮曼陀羅」など散見いたします。

義太夫淨瑠璃として最初に脚色されたのは、謠曲「雲雀山」から取材した「當麻中將姫」でこれは古く元祿九年の竹本座で上場して居ります。これを改作したのが並木宗輔作の「鵯山姫捨松」で、二百年前即ち元文五年二月豊竹座の勾欄に初演されたのであります。その三段目の切が「雪責めの段」で、以來繰りかへし上演されましたが、寛永九年には「中將姫古跡松」の外題で行はれ、今日でも外題は一定しない樣であります。

當麻寺は大和國二上山の麓にあり、牡丹の名所で知られて居りますが、古く天平年間、藤原豊成の娘中將姫が、世をはかなんで此處に籠り、靈夢によつて蓮の系で觀無量壽經の一部始終を現はした曼陀羅を織つて佛に捧げ、今も當寺ではこれを祕藏すると申します。中將姫が佛門に入つた動機は、父豊成が弟押勝の謀叛に連座して筑紫へ流されたので、世を果敢なく觀じたと云ふのが比較的實說に近い說でありますが、一說によると、繼母照日の前の毒手に

人形

岩根御前　桐竹龜松
大貳廣次　吉田玉市
中將姫　吉田光造
下僕角内　吉田兵次
下僕宅内　吉田多三郎
桐の谷　吉田榮三郎
浮舟　桐竹紋司
豐成公　桐竹門造

かゝつて大和國宇陀郡の雲雀山に捨てられたのを、家人春時の情でその命を助けられ、山中に柴の庵を結んで養はれて居るのを、後豐成が狩に出て圖らずも姫に邂逅つて連れ歸り、それ以來佛を信じ脫俗した、と云ふ俗説もあります。

淨瑠璃では、この方の説を取つて脚色したもので、古い外題の姫捨松もこれから考へて附けられた題名であげませう。

梗概

中將姫雪責の段

横佩右大臣豐成の後妻岩根御前は至つて腹黒い人物だつた。岩根は大貳藤原廣次などゝ通じ、政治をめぐる陰謀に加擔して居た。

豐成の息女中將姫は親思ひの發明な娘だつたけれど、繼母岩根は何かにつけて中將姫が邪魔で、事々に邪慳に振舞ふのだつた。そして下部林平とのあらぬ不義の濡衣を着せ姫を責めさいなんだ。それに夫豐成の祕藏の御物觀音の像を盜まうとして姫に見られ、これが腹立たしくてならなかつた。

岩根は一策を案じ出し、姫にこの觀音像を預け置いた。そして腹心のものに姫の油斷に乘じてこれを盜ませ、紛失の罪を姫に塗り付けやうと企んだのである。

それは雪の降る日だつた。大貳廣次は、豐成の館に觀音像を早く差出せ、と催促に來たのだつた。廣次は勿論岩根のからくりを知つて居た。どうやら奸計が豐成に勘づかれたらしくもあり、この上は中將姫を亡きものにするのが岩根たちには得策だつた。

七日七夜の責め苦に面やつれした中

將姫は雪の庭前に引き出された。廣次は言葉も荒々しく姫を責めたけれど、佛像紛失について白狀する何物もなかつた。

心ない下部どもは手に手に割り竹をもつて雪にこゞえる姫を打つた。その時、枝折戸の外へ駈けつけて來たのは侍女桐ノ谷だつた。桐ノ谷はかねてから岩根の邪な仕打ちを惡み姫の同情者の一人だつたのだ。

桐ノ谷はこの場へ入つて却つて姫を助ける邪魔になつては、とひとり氣を揉むのだつたが、又も降りしきる大雪に姫の痛々しげな樣子にたまり兼む自分の着て居る上着の一重をぬいで、切戸の中へ投げ入れた。

岩根はこれを見るより猶ほ苛だつて自ら姫の髮をつかんで捻伏せ引き廻した。桐ノ谷はもう我慢が出來なかつた枝折戸を破つて內へ駈け入つてこれを止めやうとした。此處へ奥から出て來たのは侍女浮舟だつた。浮舟は前々から岩根に肩を持つと見せかけて居て、實は姫の力になつて居たのだ。岩根に代つて姫を打つと、姫はそのまゝ悶絶してしまつた。

これを見た廣次も岩根も流石に驚いて、そしらぬ顏をして立つて行つてしまつた。

あとに浮舟は姫を抱き起すと、姫は眼を開いた。それは浮舟の敎への通り死んだと見せて居たのだつた。

人の來ぬ中と、立ち上る折しも、待て暫し、と聲を掛けたのは父豐成卿だつた。

豐成は姫を此處に置いては爲にならないことを悟つた。そしてあくまでも姫を死骸として口をきくのだつた。

豐成は今日の岩根の仕打ちも知つて居た。しかし、この場合天下國家の安泰を計るためには、岩根に賴み込んで置かなければならなかつたのだ。それを思ひ、責め苛まれる我が子を見殺しにする心の中の苦しさ。國のため、親のため、よくも艱難して呉れた、と姫に血の涙を絞つたのであつた。

姫は桐ノ谷浮舟兩人に伴はれて、雲雀山へと難をのがれて行くのだつた。

國土を母艦に

飛び立て少年

攝州合邦辻

合邦住家の段

前　竹本織太夫

竹澤團六

後　竹本大隅太夫

鶴澤清八

解說

「攝州合邦辻」は安永二年二月、大阪北堀江座の勾欄に初演された淨瑠璃で、作者は菅專助、若竹笛躬の兩人であります。

院本戯曲としては珍らしく纏つた短篇で上下二卷、上の卷は、あられの松原毒酒の發端、中が高安館、切が綸旨取戻し、下の卷は口が天王寺西門、切が今回上演の合邦住家になつて居りますが、全篇の眼目は申す迄も無く此の合邦住家の段であります。

一段の趣向として嘘にもせよ繼母が義子に戀すると云ふ、骨肉の戀を主題とした異つた作柄である爲、大正十四年豐竹古靱太夫が、御靈文樂座で復活上演するまで、永らくその筋から上場を禁じられて居りました。

全編中この下の卷は、中々巧く書かれて居ります上に、節付も器用に面白く出來て居ります爲か、今猶ほ非常な流行を見て居る次第であります。

この淨瑠璃が謠曲の「弱法師」に由來して居ることは何方も御承知かと思ひますが弱法師の傳說は、謠曲に入る一方、說經の「しんとく丸」として世に廣まり、古淨瑠璃に於ても是を轉用して語つて居ります。此の說經系統の古淨瑠璃「しんとく丸」に謠曲の「弱法師」の構想と詞章を取入れて作つたのが、初代竹本義太夫の正本「弱法師」で「合邦辻」はこれを根幹として成立したことは明かであります。

「弱法師」の物語は何れも、繼母の讒言により追放され辛苦する高安左衞門の一子俊德丸の運命を描き、遂に攝津の天王寺に於ける父の旅行滿願の日に父左衞門に邂逅

人形

親合邦　吉田玉助
合邦女房　桐竹政龜
玉手御前　桐竹紋十郎
俊徳丸　吉田榮三郎
淺香姫　桐竹紋太郎
奴入平　吉田玉徳

つて求はれると云ふのが大體の骨子になつて居り、「合邦辻」の異色特色であり、極めて大切な想になつて居る骨肉の戀、繼母と義子の戀と云ふ筋立てには觸れて居りません。

年若い繼母がさ程年の違はぬ美しい義子に戀をし、それが悲劇の動機となる、と云ふ主題は、實に古く說敎の「愛護若」と云ふ物語に扱はれたもので「合邦辻」の趣向もこの邊から系統を引いて居るのであります。

この段中、殊に心を引かれますのは、切になり、しめやかに物淋しく語り出される「しん〳〵たる夜の道」から、とぼ〳〵と玉手の出になるあの邊りの夜更の情調でありませう。無言の老人夫婦が娘の亡き魂を弔ふ鉦の響き、華やかな色彩の無い沈んだ舞臺面だけに、淨瑠璃劇獨特の云ひ知れぬ詩情を湛へるのであります。

母に玉手が自分の戀を打明ける條、又俊德丸に色氣を見せる條など、バラでは十分愁を含んで、表面では艶かしく見せると云ふ皮肉な語り物だけに、その演出の解釋に色々と工夫がある譯であります。

又、玉手の「苦しき片頬に笑ひ顏」の一條など讀んで字く如く至難な個所かと思ひます。人形の演技も、玉手が母に無理やりに納戸へ連れられて行くくだり、又「嫉妬の亂行」のあたり、其他人形劇獨特の妙味が各所に發見されることであります。

梗概

合邦住家の段

安井合邦の娘お辻は、氏なくして玉の輿、河内の國の領主高安左衞門の後妻玉手御前と云はれる身になつた。所が如何なる天魔が魅つたのか、義理ある先妻腹の子俊德丸に想ひを寄せ何かと云ひ寄るので、俊德丸は道ならぬ戀に堪えかねて、許婚の淺香姫と手

をたづさへ玉手の親の合邦の庵室へと身をさけたのであつた。この事を知つた玉手は、尚も俊徳丸の後を慕つて合邦の庵室まで追つて來たけれど、合邦は俊徳丸から娘玉手の邪戀を聞かされて居るので、高安殿への義理を思ひ、どうしても門側も踏せぬと、内に入れやうともしなかつた。然し遂に母は女の身の心弱さから、玉手を幽靈と云ふ事にして、幽靈ならば入れても仔細はありますまいと合邦を說き伏せ、漸く内へ入れて不義の云ひ譯けを聞かうとした。と玉手は云ひ譯けどころか「思ひ切られぬ戀の道、俊徳様の御行方尋ね、女夫にして下され」とかき口說くあり樣なので、合邦は今更の樣に呆れ果て、俺も以前は青砥某と云ふ歷とした武士、浪人しての捨坊主ながら、誠の道を通して來たに、と怒り立ち、唯一刀に斬つて捨てんとした。

母親は、これをなだめ、必ず娘に思ひ切らせて見せますと、玉手を無理に奥の一ト間へ連れて行つた。

折柄奴入平は俊徳丸の後を尋ねて來たのだつたが、フト玉手の姿を見付けて、樣子をうかゞはんと傍に身を忍ばせて居たが、一と間から兩眼盲た俊徳丸が、淺香姫に手を取られて、なよなよと現れるので、入平は、斯くまで玉手御前が執念くつきまとふ上は、一刻も早く此の家をお立ち退きあれかし、と既に伴ひ出やうとした。その時玉手は奥から走り出で、俊徳丸に取り縋り入平の意見の言葉も耳に入れず、又しても切ない戀をうつたへるのだつた。

これを耳にした合邦はたまりかね、一刀脇腹深く刺し通し、その息の根を止めやうとするので、玉手は是を、しばしと止め、痛手に惱みながらも「是には深い樣子のあること」と自分の苦衷を物語つた。

それは、高安の妾腹次郎丸が奸臣坪井平馬と心を合せ、已が家督を繼がんものと、その爲に俊徳丸の一命を奪はんとしてゐる事を知つたので、心にもない戀をしかけ毒酒に形相を變へさせたのも、御家督さへお讓ぎなくばお命に別狀なからうと、思ひ餘つての思案だと云ふのである。そして又、かうしてお後を慕ひ參つたのは、此の病を本復させるため、と云ひつゝ手にする鮑貝を出して、寅の年月撞つた我が血汐を盛つて俊徳丸に飲ませると、不思議や人相はもとの通りになるので、一同は初めて玉手の苦計を知つて今更涙にくれるのだつた。その時にはもう玉手の知死期は近づいて居た。合邦が取り出す百萬遍の殊數の輪の中で、一同に見守られつゝ大往生を遂げた玉手御前であつた。

東海道膝栗毛

赤坂並木より古寺まで

彌次良兵衛　喜多八

赤坂並木より古寺まで

彌次良兵衛　豐竹呂太夫
喜多八　竹本織太夫
和尚　豐竹司太夫
親父　竹本七五三太夫
千松　豐竹松島太夫
豐澤仙糸
野澤松之輔
野澤市治郎
鶴澤清友
竹澤團作

人形

彌次良兵衛　吉田光造
喜多八　桐竹龜松
親父　吉田玉市
悴平松　桐竹龜之輔
和尚　桐竹門造

解說

この淨瑠璃は十返舍一九の名作「東海道膝栗毛」の中、御油から赤坂の條を脚色したもので、新內で毎度お馴染の「赤坂並木の段」以下の滑稽場であります。原作の「膝栗毛」の初編がはじめて上梓されたのは享和二年で、八編までひと先づ完結したのが文化六年であります。その後十二編まで刊行され、前後二十一年間に及びました。その噴々たる市中の好評は想像にあまりあるもので、早速歌舞伎にも脚色され同時に義太夫淨瑠璃にも仕組まれ大評判を取つたのであります。その中で安政元年七月江戸中村座にて「旅雀我好話」の名題で上演された膝栗毛の脚色は今日の新內や義太夫の膝栗毛の藍本であると申します。

戀女房染分手綱

重の井子別れの段

（夜の部）

重の井子別の段

切　竹本重太夫

豐澤廣助

解說

本曲は、寶曆元年二月大阪竹本座に上場された前後十三段の長編淨瑠璃であります作者は吉田冠子、三好松洛二人の合作で、今回上演の「重の井子別れの段」はその十段目に當り、俗に「戀十」と云はれて居ります。この「子別れの段」は五行本には「三吉愁歎の段」ともあります。

全編は、東山の段、涼みの段、與作勘當の段、重の井訴訟の段、道成寺の段、孝行の段、恩愛の段、道行情乘掛の段、親里の段、道中双六（子別）の段、旅籠屋の段、歸參の段、敵討の段の十三段で、申す迄もなく、重の井子別れは、淨瑠璃に又歌舞伎狂言に、繰りかへし上演され人口に膾炙されて居る所であります。

「戀女房染分手綱」はそれより前、寶永五年に上演された近松門左衞門の「丹波與作關の小萬待夜小室節」、改題「丹波與作」の改作であることは間違ひなく、殊に道中双六の段（子別れ）では近松の章句をそのまゝ踏襲して居ります。

「戀十」は曲としても異色ある美しい調がついて居り、賑やかな道中双六の段の一とくさりがあつてから、いつもの「お傍の衆に囃されて」と輕々と美しく語り出され、一段を通じて優美に品格を保つて終始するのが語り口の掟となつて居ります。

艶あつていけず、美しくも哀れ深く、上品に語られるこの一段は、章句のうつくしさと相俟つて好個の名曲の一つになつて居

人形

調　姫　桐竹小紋
乳母重の井　桐竹紋十郎
馬方三吉　桐竹紋司
本田關三左衞門　吉田玉市
こし元お福　桐竹紋太郎
宰領　吉田常次
宰領　吉田藤一

ります。

梗概

重の井子別れの段

丹波の城主由留木家の息女調姫は、關東の高家入間へ養子嫁子として江戸へ下る約束が出來た。入間家からは奥家老本多彌三右衞門が迎へに來て用意萬端整ひ、いざ出立と云ふことになつた。

所が未だ年齢は僅か十歳になつたばかりの姫君は、この東下りが嫌だと俄に云ひ出してむづかるので、お乳人重の井はじめ腰元たちは、手をつくして慰めたけれど、どうしても御機嫌が直らないので一同困りはてゝしまつた。

そこへ、丁度姫君と同じ年頃の馬子の三吉と云ふものが、東海道道中双六とやらを弄んで居ると云ふことが聞えるので呼び寄せて姫君の御機嫌をとらせやうと云ふことになつた。

三吉は御前近くの縁先へ來て望まれるまゝに道中双六の繪解きを、ことば面白く囃したて、東國の珍らしい物語をするので、すつかり姫君のお氣に入り、直ぐにも東へ入ると云ふことになつた。

さて、かうして頑是ない姫君が東へ下ると御意あつたのは何と云つても、馬方三吉の手柄である。お乳人重の井は、その褒美にと御前から下され物の菓子や、なにがしの錢を三吉に與へた。

すると突然、三吉は「由留木殿のお乳人重の井さまとはお前か、そんなら

おれが母様」となつかし氣に抱き附かうとするのだ。重の井は、この小さな馬方がわが子とは、まさかと驚くのだつたが、しかし胸に覺えのないことではないのだつた。

話は十年のむかしに遡らなければならない。

この由留木家の家老伊達與三兵衞の倅に與作と云ふものがあつた。重の井は能師竹村定之進の娘で、腰元として御殿奉公をして居る中、與作と何時か離れがたない仲になり、その間に與之助と云ふ男の子さへもうけたのであつた。

この不義のことが顯れ、惡者の讒言によつて與作は、故國を追放され、馬方にまで零落してしまつた。重の井は父親の定之進の申譯の切腹により、與作と別れ、その後再び歸參して、姫君のお乳人となつたのだ。

今此處に馬方三吉から、母様とすがりつかれ、その身の上を聞かされ證據の守り袋まで見せられてみると、三吉はまさに我が子の與之助に疑はなかつた。

三吉は現在父親の與作とも別れ幼ない身で近江の石部に馬方奉公をして居るのだ。その望みと云ふのは、父親を尋ね出し、親子三人水入らずで一日でも暮したいと云ふのだつた。これを聞いて重の井は胸もくだけるばかり、現在我が子に馬追ひをさせ、おのれはお乳人よと衣裳を着飾つて居る心苦しさ、しかし今の場合母子と名乘つては、姫君のお名にも障ることと、たゞ氣も亂れてむせび泣くのであつた。

見るからに賢し氣な三吉に人違ひと僞つても無駄なことは知れて居た。譯をよく話せば、と今までの物語を三吉に詳しくして聞かせ、心を鬼にして今では母でも子でもないもの、とそのまゝ別れやうとするのだつた。三吉も聞き分けて立ち上つたが、その見すぼらしげな後影に又こみ上げて來る悲しさは、世が世ならば千三百石の世取りのこの子、雨風雪降りの夜道に馬追ふ姿も偲ばれ、我が身を投げ伏して奉公の身の淺ましさに打歎いたのであつた。時に奥口から、姫君の御立ちが知らされ、乘物も舁き寄せられた。

そして三吉が姫君のお伽にと、泣く泣く唄ふ「坂は照る〳〵」の馬子唄に涙を噛んではかない親子の別れをしたのであつた。

三勝半七　艶容女舞衣

酒屋の段

前　竹本住太夫

絃平改め
野澤吉二郎

後　竹本南部太夫

鶴澤重造

琴　豊澤仙三郎

元祿八年十二月七日攝津國西成群下難波村字サイタラ畑に心中があつた。二人の褄と褄を紅絹表の帛紗縮緬で堅く結ばれてあつたのが、非常に人目を引いたと言ふ。男は大和國五條新町の赤根屋半七、女は島の内美濃屋の三勝と云ふ遊女であつた。

當時此の心中は流行唄などにも唄はれて大變な評判であつたが、淨瑠璃に仕組まれたのは、十五年目の寶永五年豐竹座に書卸された紀海音作「笠屋三勝二十五回忌」が最初である。此の他に元文三年同じく豐竹座で演じられた原田由良、並木宗輔作の「茜染野中隱井」があり、現在行はれてゐる「艶容女舞衣」は安永元年十二月豐竹座初演のもので、竹本三郎兵衞、豐竹應律、八民平七の合作である。

大體此の作は上、中、下の三卷からなり、上が生玉の段と島の内茶屋の段中の卷が新町橋の段と長町の段、下の卷が今宮戎の段と、上鹽町の段で、目下上演中の酒屋の段は、卽ち上鹽町の段である。

「今頃は半七さん……」の一節は、世話物の粹であり、最も人口に膾炙してゐるもので、お園の貞節に至つてはもとよりの事であるが、末段に近く、捨子お通の守袋から現はれたその父半七の遺書を、骨肉がまばたく燈下に額を集めて、互ひに讀み合ふ涙のうちにそれを縫ふて聞こへて來る隣の稽古唄

人形

嫁お園　吉田文五郎
親宗岸　吉田玉助
半兵衛女房　桐竹政龜
舅半兵衛　吉田光造
娘おつう　桐竹小紋
茜屋半七　吉田玉男
美濃屋三勝　桐竹紋司

梗概

――鶯の片羽のとぼ〳〵と、子にまよいゆく小夜千鳥――のあたりは、景と情と、兩々相俟つて、哀切の極と云ふ可きである。

茜屋の半七は、お園と云ふ貞節な女房がありながら、美濃屋の三勝と云ふ遊女と馴染んで、お通と呼ぶ子まで儲けた。

尙その上、廓のいきさつから、半七は人殺しの罪まで犯して了つたが、半七の父半兵衛は、不孝な子程愛しさのまさる親心から、我が子の罪をその身に引きうけて、代官所で繩にかかつたのである。

一方、お園の父宗岸は、半七の不行跡に愛想をつかして、無理にお園に暇をとらせて連れ歸つたが、半兵衛の半七を思ふ溫い親心にうたれた宗岸は、己の自分勝手の舞振を、心から恥じた。そして再びお園を伴づて半兵衛の許へ詫に行くのであつた。

お園も亦、夫に嫌はれるのも、自分の不束からと我と我が身を責め、自分さへ此の世になければ、總てが幸福に納まるものと自害を覺悟するのであつた。

と、また三勝と半七は、お通の守袋に遺書を認めて、これをソッと我が家に送りこむと、二人は格子先から、影ながらに暇乞ひをして死の旅に急ぐのであつた。

それと知つて、一家はただ〳〵涙に沈むのであつたが、その後半七が廓で殺した善右衛門と云ふ男は御用金を盜んだ盜賊と云ふことが判つて人殺しの罪は玆に赦されたのである。

平家女護島

鬼界ケ島の段

切　豊竹古靱太夫

鶴澤清六

人形

俊寛僧都　吉田榮三
平判官康頼　吉田玉德
丹波少將　吉田玉市
娘千鳥　吉田文五郎
瀨尾太郎　桐竹門造
丹左衞門元康　桐竹龜松
郎黨大ぜい
雜式大ぜい

本曲は大近松の作で享保四年八月竹本座初演。全五段よりなり鬼界ケ島は第二段目に當る。全曲は平重衡の南都燒討の凱陣に初まり、清盛が横暴の極、熱病におかされて悶死の事、鬼界ケ島流人の生活と其の赦免歸洛の狀、牛若丸が女裝して常盤の館に入り、共に心を合せて源氏一味の徒を糾合する件、宗清父子の苦節に文覺上人が源氏蜂起と、平家滅亡の經路を夢見る迄を描いたもので、後年、吉田冠四、近松半二、三好松洛等に依り改作、「姫小松子日の遊」も生れてゐる。

尙、此の鬼界ケ島の段は、昭和五年一月四ツ橋の文樂座落成記念興行の際、現櫓下豐竹古靱太夫に依り、四十年振りに古曲復活の意味で上演されたものであ

る。

梗概

驕る平家を滅亡さそうとの鹿ケ谷の密謀露はれ、俊寛僧都は丹波少將成經、平判官康頼と共に鬼界ケ島へ流された。

それから三年の月日は經つた。

憂き艱難の中にも戀はあつて、成經が海女千鳥と契つた話を、俊寛は康頼から聞くと、憂き年月に珍らしい笑を浮べつつ、成經と千鳥を招き、何れ赦免の沙汰もあらば、丹波少將成經が北の方とも仰がれ樣と、心か

ら祝ふのだつた。

折柄、此の島目ざして漕ぎ寄る船があつた

やがて瀬尾が船から下り立ち、懐中の赦免狀を取り出して、此度中宮御産の御祈禱に、非常の大赦行はれ、鬼界ヶ島流人の中、成經、康賴を赦免すと讀み上げた。

だが、俊寬一人は赦免狀に名がないのだ。俊寬の驚愕、悲嘆——。

併し其の時、丹左衞門尉元康が靜かに進み出て、特に小松內府の計ひに依り、俊寬をも備前國まで召還さるる旨を告げるので、三人は手を取り交して嬉し涙に咽んだが、急ぎ立てられるままに、船へ乘ることになつた。

千鳥も共に乘船しようとすると、それと見た瀬尾は慌てゝ遮り、成經が仔細を明して賴んでも、俊寬が口を添へても、頑として乘船を拒んだ。

尙、其の上、俊寬の妻あづまやが、淸盛の意に背き、非劫な最後をとげた事などを、憎々し氣に語るので、俊寬は、今更都に歸つて何かせんと、矢庭に瀬尾が持つた刀を奪いとるや、瀬尾をその場に斬つて捨てた。

そして千鳥を急き立てゝ船に乘せ、自分は上使を討つた科により、そのまま島に殘ることになつた。

浪間を遠うざかり行く船。

哀れ、荒磯邊の岩角に、それを見送り叫ぶ俊寬——。

濱千鳥が無心に鳴いて飛んで行く。

(佐和利)鬼界ヶ島の段

……今のを聞いたか我が妻は入道殿の氣に遣うて斬られしとや、三世の契りの女房死なせ、何樂みに我れ一人京の月花見たうもなし、二度の歎きを見せんより、我を島に殘し代りにおことが乘つてたべ、時に關所三人の切手にも相違なくお供にも誤りなし。世にたよりなき俊寬我を佛に爲すと思ひ、捨て置いて船に乘れ乘れと泣く〳〵手を取りひつ立てひつ立て御兩使賴み存ずる此の女乘せてたべとよろぼひ寄れば……。

釣女

人形

太郎冠者　竹本住太夫
大名　竹本濱太夫
美女　豐竹宮太夫
醜女　竹本南部太夫
ツレ　竹本文字太夫
鶴澤友衞門
野澤吉三郎
鶴澤燕三
豐澤仙三郎
豐澤廣若
豐澤團伊三

名　吉田玉助
太郎冠者　吉田簗三
美女　吉田簗三郎
醜女　桐竹紋十郎

太郎冠者を呼出した大名、未だ定まつた妻は無し、戎三郎殿は艶福者と噂故、西の宮へ立越えて妻を申受ける積り、汝供を仕れと……申付ければ、太郎冠者も、私も此年まで定まつた妻が御座らぬ、序ながら申し受けませうと喜んで道案内に立つと、道中面白く西の宮へ着いた。神前に祈つて、大名も太郎冠者も一つ夢、暫し假睡む中に妻となる者は西門の一つ階に居る……と、お告げを得るので、連れ立つて階の下へ來て見ると、竹の先に糸の付いたものがある。

戎三郎は何でも釣針で釣るとの事、一つ釣つて見やうと、木比壽三郎殿の釣針を下して、三十二相揃ふたよい妻を釣らうよ、十七八を釣らうよ……と、先づ大名が糸が投げて、釣當てたは被衣目深な上臈で、恥し相に被衣を脫れば目も綯な美女、太郎冠者も躍起となつて釣れば、釣當てたは之も被衣を深々と被つた女、喜んだ太郎冠者が被衣を脫らうとすれば厭ぢやと頭を振る。宥めつ賺しつやつと被衣を脫れば、頼うだお方の釣當てたのとは似もつかぬ醜女なので、驚いて逃げれば醜女は追ひかける。大名は面白がつて醜女を突付けたが、太郎冠者は逃げながら、上臈の手を取つて行かうとし、跟けつ廻しつ追懸る。

文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちそうなことを、簡單に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來——舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的鄉土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと云つてはない。けれども、文樂は寬政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來、殆ど本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のはうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと云はれる。卽ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線彈きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはずつと古くからありました。記錄にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くぐつまはし）といふものが見える傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことにある。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歷史と云へるでせう。これに對して三味線は永祿中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザッと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが

提携し、慶長の初年あたりは、その浄瑠璃と人形遣ひとが握手して、浄瑠璃といふ物語を、云はば立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形浄瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その浄瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音樂上の大成を試み作者近松門左衞門を得て、戲曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形浄瑠璃芝居とあれば、義太夫節に限るやうになつたのであつた。これは來歷のあらましであるが、浄瑠璃と三味線とによる演奏內容と、人形の動作とがピツタリ合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歷史的に云ふと、面倒だから、簡單に記す。

人形が手も足もないデクノボーから肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と、人知とが費された。一個の人形を三人がかりで、寫實的に遣ふやうになつたのが享保十九年の「蘆屋道滿大內鑑」（葛の葉の狂言）からといふことになつてゐる。今日から大凡二百年前にあたる。但し文樂座でもツメ人形（略してツメ）と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむづかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形浄瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた。慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも、歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪

文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、その以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲繰り式のはもつと規模が小さかつた。

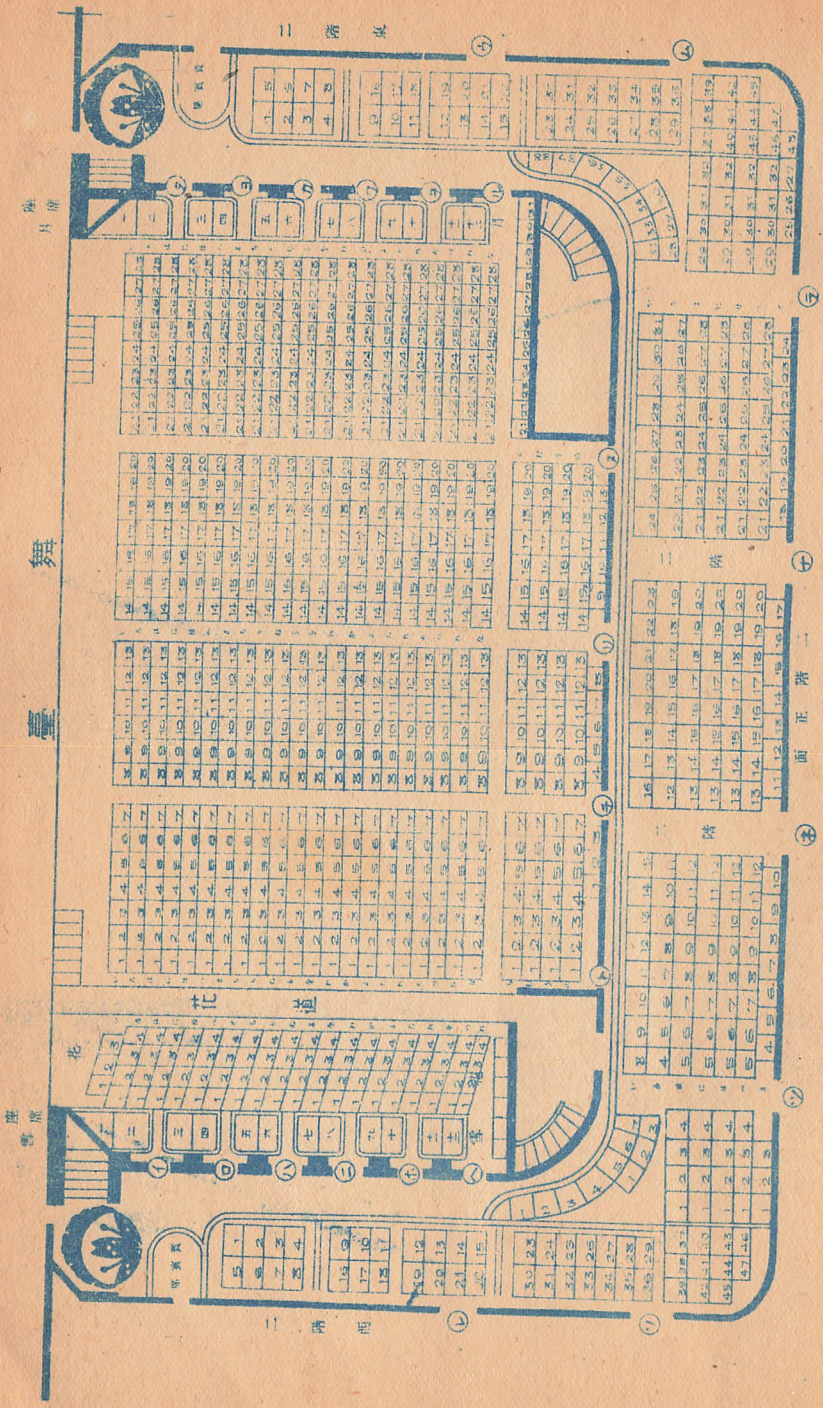
今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて、二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたからの名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、彈く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のことで、義太夫近松頃のは、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り、蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。それが次第に「出語り、出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音樂は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの、人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雜な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

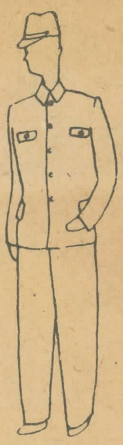
（河竹繁俊氏稿より抜萃）

新橋演舞場座席表



決戰下服裝に就き

皆様へお願ひ



今こそ決戰、一億總蹶起の時、擊ちてし止まむの氣慨に燃えて戰爭生活の實踐に徹底せねばなりませぬ、演劇、演藝、映畫亦決戰下必要不可缺な戰爭生活の一部面であることは今更申すまでもなく、隨つて御觀覽は戰爭生活の一部であり延長であります。

既に戰爭生活の延長である以上、御觀覽の御態度、御服裝等飽くまで國家の要求に融け込まなければならないと存じます。

從來御觀覽の場合、動もすれば服裝華美に流れ過ぎると云はれました平時なら兎に角、此の決戰下に左様のことのあるべき筈はありませんが、然し大勢様の御集りの劇場ですから、服裝は格別目立つのでありまして、その場合の服裝が時代の流行を作るとさへ云はれました、事實さうだつたのであります。

新調は見合せ
今後の衣生活は
うよしましょうか

だから今日御集り下さる皆様が服裝の簡素美、剛健美、明朗美に徹底致され率先範を垂るるの思召して、總て決戰下にふさはしい服裝を御召し下さらば、それが一代の風俗を作り逞ましい日本人の心意氣となつて、決戰下一億の士氣はいやが上にも昂揚さるるに至りませう。

どうぞ皆様。

これからは、殿方も、御婦人方も、假りにも絢爛華美などと云ふ舊觀念を美事一蹴し簡素、剛健、明朗な服裝を以て場内を御埋め下さい。そして御心豊かに朗らかに、決戰下必要不可缺の健全娯樂を、御覽下さいますやう御願ひいたします。

松竹株式會社

(停) 定價 一部 貳拾錢